

「ここにあるコーヒークップは、全部あの人の好みで集めたものばかり。ひとつひとつに思い出があるけど、そんなこと言ったら商売にならないもの。それに所詮食器だから割れるときには割れるのよ。そんなに気を遣わないでもいいの：」

こう言いながら、ハルはひと段落した里子に、奥へいつしよに来るよう目配せした。

「次の定休日でもいいから、松代さんの餞別の品買ってきてくれない」

と、頼まれた。

日曜日、里子はさつそくデパートへ行った。

春といってもまだ肌寒い日もあるので、寒がりや

の松代には、薄手のストールがいいだろう、と考

え、店員さんにも選んでもらった。

松代の好きな薄紫に小さな花が散りばめられ

たのが二人とも気に入って、さつそくレジに持って

行く。一緒に選んでくれた店員さんが包装をして

いる間、里子はボンヤリ突っ立っていた。すると

突然、

「これ、あちらにいらつしやるお客様から、お渡

してくださいとのことですよ」

別の店員さんにこう声をかけられた。

渡された包みにはオレンジ色のリボンがかかっ

ていた。

驚いて里子が振り向くと、入り口のドア付近に

トレンチコートを着た宮川が立っていた。

リボンの間にメッセージカードが添えてあったので、里子は慌てて読んだ。

「お誕生日おめでとう。プレゼント選んでいる

最中にあなたが入って来たので、慌てました。も

し、よかつたら、食事いつしよにしてくれませんか。玄関で待っています」

里子は、昨日まで覚えていた自分の誕生日を

すっかり忘れるところだった。

ストールの包みを受け取ると、里子は急いで

宮川の側へ行った。

「こんなものいただいて、すみません」

「気に入ってくれるといいんですが……」

宮川は、はにかんだ微笑みを返してきた。

「本当にありがとうございます」

里子は素直にお礼を言った。

二人は商店街を抜けて、中央通りにあるホテ

ルのラウンジで向かい合った。赤ワインで乾杯し

たあと、里子はプレゼントの包みを開いた。箱の中

から最近よく耳にするブランド名の入ったス

カーフがでてきた。さつそく三角折にして肩にか

けた。

「うわあ、この青色、いいですね。サンゴ礁の海

みたいで、ひよつとしてこのピンクや赤の絵柄は、

珊瑚や貝なのかしら？」

中の絵柄は凶案化されたものだったが、黒いセ

「ターによく映えていた。」

「思っていた通りでよかった。よく似合っている。緋の着物にしないでよかったですなあ」

「もう、宮川さんたら」

二人は顔を見合わせて小声で笑い合った。

「あなたといると、いつも笑顔でいられるので、楽しいな」

「そうですか」

「ところで、休みはいつも何をしているの？」

「掃除、洗濯、それから……」

夫へ手紙を書く、とつけ足そうとして里子は口を閉じた。

「独り暮らしはしたい、そうですよね」

「なんで、わたしが独り暮らしだって、知ってるの？」

里子の口からは、宮川にも他の客にも自分の船員の妻であることは言っていなかった。

「田原さんから聞いたけど、彼が誰から聞いたのかは知りませんよ」

里子のことを他にもいろいろ知っていたそうだったが、宮川はそれ以上、何も言わなかった。

「田原さんなら仕方ないわ。ハルさんの旦那さんが生きているときからの客だから。でも今日は嬉しかった。自分の誕生日忘れるところだったのに、宮川さんに思い出させてもらって」

「いやあ、かえって女性に年のこと思い出させて、

すみません」

「ほんと、そうよ。思い出さなかったら、自分が一っ年取ったことも忘れていられたのに……。」

冗談です」

二人は前菜を食べながら、また笑い合った。

食事を終えた二人は、タクシーで栗林公園へ梅を見に行った。食事中に里子が、桜より梅の方が楚々としているのに、花はしっかりした色をして

いるから好き、と言ったのがきっかけだった。

濃い桃色、薄桃色、白、梅の花は桜のように

ひと枝にそれほど多くの花はつけないが、ふくいくとした香がする。

里子が低い枝の花に顔を近づけていると、

「絵になっている……。しばらく動かないで」

いつになく宮川の厳しい声が飛んできた。

面映ゆい思いの里子にかまわず、宮川は長い指で作った四角を回してみたり、また元に戻してみたりしていた。しばらくして彼は、里子の方へ歩いて来ながら、

「ありがとう。心の写真機にバッチリ焼きつけたよ」

と、言った。

「こちらこそ、今日はいいい誕生日になりました。

感謝します」

「休みの日には、また食事つき合ってくださいか？」

「ええ、いつでも」

何の躊躇もなく返事していたことに里子は自分でも驚いていた。

しかし宮川は、里子と会ってから一週間、どうしたことかばったり『はまゆう』に現れなかった。三日くらい来ないことはよくあったが、こんなに長く姿を見せないことは初めてだった。

（独り暮らしだと言っていたから、何かあったのかもしれない……。確か名刺をもらっていたな。夜にでも探して電話してみよう。もし家の中で倒れでもしていたら、大変だ）

独りの不自由さを知っている里子は、心配だった。子供たちが県外へ行き、独りになって、初め

て寝込んだときのことを思い出す。

（このままベッドの中で冷たくなってしまったも、誰にも見つけてもらえないのではないか……）家族と暮らしていた頃には、考えもしなかった不安が過った。

家に帰ったらさっそく宮川の名刺を探して連絡してみるつもりだったのに、淳一から手紙が来ていたので、後回しになってしまった。

前略、お元気ですか。今朝未明にシアトルに入港しました。

由良ドックでは、いろいろありがとう。あなたの思いやりが心に染みしました。あれから僕もいろ

いろ考えました。今まで家族に縛られ好きに

できなかったあなたを自由にしてあげるとともに、できるだけ協力しようと考えました。でも、あなたは自分で思っているほど、健康体ではないので、頑張り過ぎないよう、注意してください。

僕ももう若くないのか、由良を出港してから三日間くらいは、当直が終わると寝てばかりいました。最近は、仕事の充実感に駆られて突っ走ってしまい、自分でも無理をしているな、と思うことがあります。

ドックでの疲れは、すっかり取れましたので、もう心配いりません。あなたも健康に留意して、充実した日々を送っ

てください。

里子へ

淳一

思い切ってハルのところで仕事をしていることを書き送った里子の手紙はまだ受け取っていないらしい。海外の郵便事情は日本のようによくないので、どこか違うところへ行ってしまったのかもしれない。何年前かに、ロサンゼルスへ出した手紙が、半年後に破れて戻ってきたこともあったので、

どうなったのか、里子はちよつと心配になる。風呂から上がって、テーブルの上へ名刺入れを持ってきて、宮川竜一を探していたとき、電話が鳴

った。

「あつ、里ちゃん、遅くにごめん。お店に宮川さん来てるのよ。あなたに会いたがっているけど、よかったら来てくれない……。タクシー代は『はまゆう』につけといて」

「うん、わかった。すぐ行くけど、宮川さん何かあったの？」

「……うん、ちよつと、他のお客さんもいるので、来てからね。じゃ、頼むわ」

ハルの慌てた様子から、たぶん店の奥から電話してきたんだな、と思いながら里子は受話器を置いた。

台所の柱時計を見上げると、午後七時を回っ

ていた。里子は、淳一からの手紙を食器棚の引き出しに入れ、風呂上がりの顔に薄化粧をして、タクシーを呼んだ。

車だったら、里子の家から『はまゆう』までは、十分くらいで行ける。店の客をしょっちゅう乗せている運転手は、里子のこともよく知っているので、互いに当たりさわりのない世間話をしてい

るうちに到着した。店には田原も来ていた。彼は酒が飲めないのので、昼間だけの常連客だと思っていたので、意外だった。テーブル席の隅の方で、宮川と何やらひそひそ話し込んでいた。他には三人の客がカウンターの中のハルを相手に、会社の上司の噂話で

盛り上がっているようだった。

宮川は、夜行列車の中で初めて会ったときのよくな青い顔をしていたが、里子が前に座ると、安心したように表情が明るくなった。

「無理を言っつて、すみません。ちよつと顔を見ただけなんです」

「ああ、よかった。何かあったのかと、心配したわ。わたしのコーヒーでよければ、淹れましよるか？」

誕生日のお礼が言いたかったけれど、里子は二人の仲を田原やハルに変に勘ぐられるような気がしたので、止めた。

「そうだね」

下戸の田原が賛成した。

「わたしにも、お願ひします。今日とはことん飲むつもりで来たのに、ジョッキ一杯のビールでこれですから、みつともないですよねえ」

宮川は罰が悪そうに頭をかいた。
「わたしは舐めるだけでも吐き気がしてくるのに、ジョッキ一杯も飲めればいいですよ」

田原が羨ましそうに言った。
里子が淹れたコーヒーをテーブルに置くと、二人はホツとしたように口に運んでいた。

(以上7月15日放送分)